財宝の海の海賊たち　掃海のコーデント

よるきつね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
財宝の海の海賊たち　掃海のコーデント

【Ｎコード】
Ｎ９９８８Ｑ

【作者名】
よるきつね

【あらすじ】
大陸の西には海賊たちの海が広がっていて、その海にはいろんな不思議さをもつ諸島があった。超常の力、スターズブルーの遺産を求めてそんな海を旅する少年と少女の物語。

少年と黒髪少女

波の音が耳に響いていた。
潮の匂いが、鼻腔を満たす。
海に浮かぶ丸太のいかだ。
「ひま、だなぁ」
「……うん。ひま」
少年の言葉に、応えたのは黒髪の少女だった。
「あー、くそっ。なんか楽しいことないのかよ」
「……、どういうのが、楽しい？」
「んぁ。お前が服でも脱げば俺は楽しいよ」
「……脱ぐ」
「おぉっ……？　おおう」
「楽しい？」
「とっても。お前、恥じらいとかないよな……。いや、少し頬赤いか？」
「穴とか掘れば、好きなだけみられるよ？」
淡々と発せられる、普通は意味の分からない台詞。
彼女の言いたいことは、彼もとりあえず理解できたのだが。
否定する。
「そういうのとはまた違うって」
「……そう。でも、楽しくてよかった」
「漂流してなけりゃもっと楽しんだけどね」
「……ほんと、そうだね」
ざぱーん。
波の音。
「見えた」
「あ……？　なにがだ？」
「……あれ」

「……って、船か！？　助かった。漕げ、リャッカ！　おーい！」
いかだを少女に漕がせながら、自身は大きく手を振りながら声を響かせる。
そして、船は近づいてきた。
「……海賊船、だね」
「あー、みたいだな」
落ちついて服を着ながら言う少女の言葉に、少年もうなずいた。
船の上から呆れたような声。
「おいおい、まだ子供じゃねえか……ちっ、金目のものは持ってなさそうだぜ」
「待てよ、けどそっちの女はけっこう……」
ぞろぞろと顔を出す海賊たち。
「やっぱ海賊だな。金目のものをだいぶ持ってそうだ」
「……ごはん」
「いつも思うんだが、なんでお前は飯食うんだ？」
「……お腹、減るから」
「だから、俺はともかくなんでお前が空腹になるんだよ？」
「……」
「ちっ。まあいいや、さっさと獲物にありつこうぜ」
「じゃあ、投げる。ていっ」
「ちょっ、まっ――」
「な、なんだぁあああ！？　ガキの男のほうが飛んできただと！？」
腕を掴まれて思いきり投げられた少年。
空中で体勢を整えると、海賊の頭上を越え甲板に着地する。
「な、なんだ、お前は！？」
「んあ……俺か。海賊。コーデント・グラム」
「海賊、だぁ……！？　ガキの分際でっ」
「やっちまえ！」
「おおうっ！」
殺到する海賊たち。

瞬間、鈍色の光が閃く。
「な……なにが起こりやがった！？　ガキの体から鉄の刃が現れて……。これじゃ、まるで魔法……」
「ぼさっとするんじゃねえ！　俺らまでやられちまうぞっ！？」
腹から巨大な鉄の刃を生やす少年。
その少年に対して迂闊に攻め込めず、海賊たちがただ取り囲む中。
「ん……なんだよ。リャッカも登ってきたのか？」
「……ひま。だめだった？」
「別にいいけど……あーあ」
「へっへっへ。ガキの女がわざわざ人質になりにきてくれるとはな。いっちょまえに刀なんて腰に佩いて、なんの役に立つってんだ。よーし、動くんじゃねえぞ、海賊少年。このナイフで女の喉を裂かれたくなけりゃな」
「やればいいだろ、さっさと……。構いやしないぜ」
「減らず口を……てめえの力の正体は分かってんだ。スターズブルーの遺産、こっちに渡してもらおうか」
へっへ、と海賊の男がにやつく。
「俺たちゃ優しいからな。このか弱い女の子と、スターズブルーを交換してやろうじゃないか」
「だから、さっさとリャッカを刺せばいいだろ。それに俺のは」
「……わいから」
「あ？　なんか言ったか、ガキ。女のほう」
十数秒後。
船の上には死体の山。
すべて、少女の刀によるもの。
「わたしはか弱いから……もっと、強くならなきゃ」
「やり過ぎだろうよ。お前のせいで、俺の見せ場がねえじゃねえか」
「……大丈夫。強いの、知ってるから。ごはん」
「あーあー、分かったよ。たくっ」
船内の食料をふたりが漁りながら。

乗っ取られた海賊船は、海を西へと向かっていた。

船の中

船の中。
出来あがった料理を見下ろしながら、コーデントはつぶやく。
「なにやってんだろうな、俺」
「……料理、上手だよ？」
「そりゃどうも。じゃなくて、曲がりなりにも俺たちは海賊なんだ。分かってるな？」
「……うん。とりあえず」
「そう、とりあえず。で、俺がこの海賊船の船長で、お前はその部下。それもいいな」
乗っ取った海賊船。
捕虜を除けば、彼ら二人しかいない。
「……私、部下」
こくり、とうなずく黒髪の少女。
リャッカ。
「で、うっかり漂流していた俺たちは、この船を乗っ取ってようやく食料にありついたわけだ」
「……美味しい、よ？」
「ありがとう。なんで俺が料理を作ってんだよ！？」
「……？」
「だーかーら、こういうのは部下であるお前の役目だろ」
「……料理、苦手」
「だったら覚えるなりなんなり――」
「……頑張る」
「おおう……素直じゃないか」
「野菜、とか」
「うん？」
「……斬るのは、得意」

「知ってるよ……」
なんとなく、船を乗っ取る時にでた死人について思い出す。
彼女が斬り殺した船員が大多数だったが、そのまま海に放り捨てた。
「というか、それを知ってたからこそお前を連れてきたわけだしな。感謝しろよ」
「……」
「なんで無言なんだよ」
「……考えてた」
「なにを」
「……感謝すべきか」
「とりあえず感謝しとけ」
「……うん。ありがとう。掘り出してくれて」
「どういたしまして。はぁ」
「……？　どこ、いくの？」
「そろそろ島でも見えてくるんじゃないかと思ってな。外に出てくるよ」
「……行く」
「そうか……って、そんな慌てて食わなくてもいいだろ！？　よくそんなに食べるよな」
「……」
「俺よか食うもんな……。昔から大食いだったのか？」
「……けぷ。それほど。同じ、くらい」
「そーかい。腹壊すなよ」
「……うん。壊さない」
外に出て。
「今日もいい天気だよな」
「まぶしい……」
「なんでぐったりしてるんだよ。それはお前なりの冗談なのか？」
「……うん」

「そうか……」
「見えた」
「なにがだ？」
「……島」
「……っ！？　本当だ！　あの遠くのちっこいのがそうか」
「……おっきい、山がある。ふたっつ」
「お前、目、いいよな……」
「……町のところ、谷になってる」
「よっし。じゃあ、行ってみるか」
「……あると、いいね」
「スターズブルーの遺産か。そんな早く見つかるとは思ってないが……」

谷間のシスター

「――ひきこもってばっかりでよ」
「――またあいつ失敗したらしいぜ」
「――教授のお気に入りだかなんだか知らないが」
「――よかったのは最初だけで」
「う」
「……う？」
「う、っがぁあああああ！？」
「……どうした、の？」
「はっ、……ゆ、夢か」
「……もうすぐ、島だけど。疲れてる？」
「いや、昔のこと思い出してたら、つい」
「……。ふうん」
「くっ、なにがなんでもあいつらにぎゃふんと言わせてやる。そのためにも――」
もう目前まで迫ってきた、二つの大きな山が特徴的な島を睨みつける。
「さっさと始まりの島の……スターズブルーの遺産が誕生した地の手がかりを手に入れるんだ！」
「……やる気があるのは、いいこと」

「のどか、だなぁ」
「……うん」
「旅人も少ないみたいだな。ま、こんな島に来る物好きもそうそういないってことだろうが。そんなに小さな町でもないけど……」
「……うん」
「情報収集にしても慎重にならないとな。スターズブルーの遺産について話すのが、平気かどうか分からんし」

「……うん」
「なんか他のセリフも言えよ。さすがに身体の倍以上もあると、荷物重いか？」
「ピザ……」
「まあ、いいんだけどさ」
リャッカの指さした店で食事を済ませ、また谷間にある町の中を歩きだす。
「……けぷ」
「ひたすら食べてたよな、お前。一心不乱に」
「……話、聞いてたよ？」
「そうか？」
「……うん。シスターさん、いるって」
「まあ修道女ぐらい珍しくもないけど……ん、なんだ？」
「ら、落石だっ！」
「逃げろぉお！？」
「大変そうだなー……」
「……みたい、だね」
「見物にでも行くか」
とことこ。
「うわぁお。ちょっと、この辺ってこういう事故多いのか？」
「あぁ？　余所者か。普段なら木々が遮ってこんなことにはならないんだが、最近火事があってな……くそっ。今月に入って、怪我人は何人目だ！？　これも竜神様のたたりって奴なのかっ」
「竜神様って……まさか、ドラゴン……？」
不思議に思って、コーデントはリャッカと顔を見合わせた。
東にある大陸はともかく、こんなところにドラゴンが生息しているだろうか。
「シスターが来たぞぉ！」
「ああ、シスター。こんな危険な場所に」
「なんと心のお優しい方だ……」

「おおう。意外と美人だ……というか、胸すごいな」
「……。うん」
修道服を身にまとった、自分達とさほど変わらないように思える歳若い女性である。
そのシスターは優しげな顔に悲しみを浮かべ、大怪我を負ってうめく少年へ近づいた。
「また、シスターの奇跡が見られるぞ……」
「おお……」
「ふん、奇跡、ね……」
「……どうしたの？」
「いや。そうか、リャッカはまだ訓練受けてないから回路が見えないのか……」
シスターがうめく少年へと向けた手から光が溢れ、優しく傷を包みこんでいく。
そして、徐々に怪我は癒されていった。
「……治った。でも」
「お前は、大陸に近い島に住んでたしな。そりゃ気付く」
「……うん」
「そうさ。シスターのあれは聖なる奇跡でもなんでもない——魔法使いの魔法だ」

嘘つきシスター

二人はシスターに会いに来ていた。家まで押しかけて。
開口一番。
「さっきのは、魔術。あなたは魔術師」
「……だから、さあ。なんでお前は真っ先にそこで前に出てくるんだよ。おかしいよな。おかしいよな？　俺が話するっってんのにどうして俺の出番を奪うんだよおい！？」
コーデントが問い詰めると、リャッカは無言であさっての方向を向き出した。
「ちっ。まあいい、とにかくシスター・アンジェリカ」
「私が、その、魔法使い？　だというんですね。ですが、私は魔法なんて使っていません」
「魔法ってのは理論的なもんだ。個人によって魔力の性質の違いはあれ、自覚なしに魔法は使えない」
「だから、魔法ではないのでしょう」
「魔法の訓練をしたものならだれでも、魔法を流し込む魔法回路を目で見ることができる。その回路に魔力を流して魔法を発動するわけだしな。俺だって専門的な訓練を受けてる」
「だからあなたには、魔法回路……ですか？　それが見えると……？」
「ああ。あんたが魔法回路を構築するのも見えてた……治療系の性質の魔力を持つ奴はそうそういないけどな」
「もし、私が魔法使いだったとしたら、あなたはどうするつもりなのです？」
「さあ、どうするだろうねぇ。神の加護を受けた奇跡ならともかく、得体のしれない魔法なんてものをこの町の人が受け入れると思うか？」
「……」

「一緒に来いよ。さっきも言ったが、治療に向いた魔力を持ってる奴なんてそうそういないしな。……美人だし」
ぼそっと言った本音に、シスターが眉をひそめる。
それから、彼女は静かに口を開いた。
「ある日、年老いた旅人がやってきました」
「あん？」
「昔のことです。彼は、広大な海を旅して神の教えを広めているのだと語りました。彼は私に不思議な心の落ち着け方を教えてくれた……それから、私はお祈りをするときに神聖な光の柱が見えるようになりました」
「その老人が魔法使いか。大陸から来たんだ」
「彼は聖職者です。私は崇高な志を持ったあの方を信じています」
「ふん……だとしてもあんたが魔法使いだって事実は――」
「シスター・アンジェリカ！？」
「大工のおじさま……どうしたのです。怖い顔をしてやってきて」
「竜神様の手紙が町長のところに届いたんだ……教会に通うアンジェリカは魔法使いである。罪深き彼女をいけにえに差し出せ、と書いてある」
「……竜神様って、手紙、書くの？」
「そもそも字を書くのかも怪しいからなぁ……」
「なんだ貴様らは、よそ者は黙ってろ！」
「あの、おじさま、私は魔法なんて知りません」
「あんたが魔法というのを使ったのかどうかは……聞かないでおこう。シスター・アンジェリカに助けられた人が多いのは確かだ。けれどな」
「けれど……？」
「あんたは竜神様の怒りを買っちまったんだ。これを拒否したら町が危ない。悪いが来てもらうぞ」
手首をつかまれたシスターが、コーデントを見た。彼はいってらっしゃいと手を振る。リャッカも同様に。

そして、家の主がいなくなった。
「手紙、か。どういうことだ……？　知らなかったにしろシスターが魔法使いだってのは間違いないが」
「……魔法使い。自覚的に」
「なんで？」
「魔術師って言った。彼女の使ったのは、魔術」
「言ったのはお前だろ」
「適切に、言い直した」
「言い直した……魔法使い。そうか、なんにも知らなきゃ、シスターはお前が言った通りに魔術師って言わないとおかしいんだ。ということは」
「……いうことは」
「っ……まんまと騙されたぁ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9988q/

財宝の海の海賊たち　掃海のコーデント

2011年5月6日05時10分発行